

ヒンディー語母語話者2名による場所表現：
「に」「で」の習得過程に関する事例研究

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2014-04-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 久野, 美津子 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.14945/00007668

ヒンディー語母語話者 2 名による場所表現 「に」「で」の習得過程に関する事例研究

久野 美津子

【要 旨】

本稿はヒンディー語を母語とする成人学習者 2 名の発話データを基に、場所を表す「に」「で」の習得過程のうち、特に最初期の様子を明らかにすることを目的とした。分析の結果、主に次の特徴が見られた。(a) 「に」「で」のいずれの習得過程でも脱落が観察された。脱落は正用の出現前または正用とほぼ同時期に観察され始め、正用出現後も消えなかった。

(b) 「に」「で」を他の助詞で代用する誤りが観察され、特に「に」を「で」で代用する傾向が顕著であった。(c) 「に」「で」と共に使われた場所名詞句に関して、位置を示す語彙は「に」と、「インド」は「で」と共に使用される傾向が強かった。以上の特徴のうち、(a) の最初期からの脱落は幼児等を対象とした研究で、(b) の「で」の過剰使用や (c) の位置の語彙と「に」とを結びつける傾向は成人を対象とした研究でも報告があり、学習者の年齢や母語が異なっても、場所表現の習得過程には類似した特徴があることが確認された。

【キーワード】 ヒンディー語母語話者、場所表現、「に」と「で」、脱落の誤り、「で」の過剰使用

1. はじめに

場所を表す格助詞の習得は第二言語 (L2) として日本語を学ぶ学習者にとって困難であり、特に「に」と「で」を混乱することはよく知られている。これまでの習得研究のうち、横断的調査による研究では、学習者が「に」と「で」のいずれを選択するかという点に着目し、その結果を報告しているものが多い (岩崎 2001、増田 2001、迫田 2001、蓮池 2004、若生 2012)。そこでは、「に」あるいは「で」の過剰使用、学習方略など、いくつかの特徴が報告されている。一方、数は多くないものの、縦断的調査に基づく研究も行われてきた (松田・斎藤 1992、久保田 1994、福間 1996、久野 2003、白畑・久野 2008)。これらの研究ではいずれも、過剰使用や学習方略の他に、学習者が「に」や「で」を脱落することが報告されている。このうち、幼児を対象とした久野 (2003) および児童を対象とした白畑・久野 (2008) では、習得の最初期の段階から助詞の脱落が確認されている。しかし、成人を対象とした研究では、データを数ヶ月間の単位でまとめて記したものが多く、脱落の最初期の様子について詳しく知ることは難しいと思われる。そこで、本稿ではヒンディー語を母語 (L1) とする成人学習者 2 名の発話データを基に、「に」と「で」の習得過程のうち、特に最初期の様子について詳しく調査したいと考える。

2. 場所表現「に」「で」に関するL2先行研究

2.1 横断的調査による研究

横断的調査による研究では、これまで主に過剰使用や学習方略について報告がされている。まず、過剰使用に関しては、学習者が「に」を過剰使用するという報告がいくつかある。岩崎(2001)は英語をL1とする学習者31名(初級15名、中級10名、上級6名、平均年齢25.5歳)を対象にインタビュー調査を行った。その結果、7名(初級6名、中級1名)は「場所」の助詞を「に」であると認識していたことを報告している。また、蓮池(2004)は中級および上級レベルの学習者120名(韓国語母語話者60名、中国語母語話者60名)を対象に、助詞「に」「で」「を」の選択テストと使い分けに関する内省調査を行った。その結果、中級レベルの中国語母語話者に「に」の過剰使用の傾向が顕著に見られたと述べている。

次に、学習方略に関しては、学習者が場所名詞と助詞とを固まりで覚える傾向があることが報告されている。迫田(2001)は中級レベルの留学生60名(中国語話者20名、韓国語話者20名、その他の言語話者20名)を対象に助詞の穴埋めテストを行った。その結果、学習者のL1の違いに関わらず、彼らが「位置を示す名詞+に」「地名・建物を示す名詞+で」という固まりを形成し、後続の動詞を考慮せず助詞を選択する傾向があったと述べている。このような、位置を示す名詞と「に」とを結び付けるという学習方略は、英語母語話者(初級～上級レベルの大学生30名)を対象とした増田(2001)や、韓国語母語話者(大学生123名)を対象とした若生(2012)の調査でも報告されている。一方、岩崎(2001)は、「に」を「特定の場所」、「で」を「一般的な場所」と捉える学習者が数名いたことを報告している。

2.2 縦断的調査による研究

2.2.1 成人を対象とした研究

縦断的調査による研究は初級レベルの学習者を対象に多く行われており、過剰使用や学習方略だけでなく、脱落についても報告がある。そのうち、成人を対象とした研究には松田・斎藤(1992)、久保田(1994)などがある。松田・斎藤(1992)は韓国語をL1とする学習者2名について、来日1～2ヶ月後から6ヶ月間に得られた発話データを基に、10種類の格助詞の使用状況を調査した。16回分のデータは8回分ずつまとめられ、前半および後半として記されている。結果は、2名共に「に」と「で」との混同が見られ、特に1名については「に」の代わりに「で」を選択する誤りが顕著であったと報告されている。また、同データによると、2名共に前半、後半のいずれにおいても「に」および「で」の脱落が観察されていることが分かる。

一方、久保田(1994)は英語をL1とする学習者2名を対象に、格助詞「を」「に」「で」「へ」について調査した。データ(発話資料と書き資料)収集は学習開始後2ヶ月が経過した時点から1年10ヶ月にわたって行われた。そして、5～6ヶ月間分のデータが1つにまとめられ、全期間が4つ(I期～IV期)に区切って示されている。結果は、2名共に「で」の代わりに「に」を使用する傾向があったことや、「に」および「で」の脱落が観察されたことなどが報告されている。発話資料によれば、脱落はI期から観察され始めているもの

もある。

これらの調査からは、成人学習者に「に」あるいは「で」の過剰使用が見られることや、比較的早期から「に」あるいは「で」の脱落が見られることなどが分かる。ただし、いずれの調査でも、数ヶ月分のデータがまとめて示されており、脱落に関しては発話例もほとんど記されていないため、習得の最初期の様子を詳しく知ることは難しいと思われる。

2. 2. 2 児童・幼児を対象とした研究

児童を対象とし、脱落の誤りも含めて分析した研究には、白畑・久野（2008）がある。ここでは、中国人児童1名（L児、10歳）の来日後4ヶ月間の発話データを基に、8種類の格助詞について使用状況を調査している。データは1ヶ月ごとにまとめて記されている。L児には日本語学習の経験がなく、来日後も文法に関する指導等を特に受けていなかった。調査の結果、ほとんどの格助詞で脱落が見られた。脱落が観察され始めた時期は正用の出現前、あるいは正用出現とほぼ同時期であった。「に」「で」についても、それぞれ滞在3ヶ月目に脱落と正用とが同時に観察された。誤りには脱落のほか、代用の誤りも見られ、「に」の代わりに「は」「で」「の」「へ」が、「で」の代わりに「は」「に」「の」や「でが」（例：*自分でが）が用いられていた⁽¹⁾。

一方、幼児を対象とした研究には久野（2003）がある。対象としたのはポルトガル語をL1とするブラジル人兄妹2名（Y1、Y2）である。彼らの保育園入園直後から1年6ヶ月間に得られた発話データを基に、「動作場所」を表す「で」と「存在場所」を表す「に」について調査を行った。データは1ヶ月ごとにまとめて記してある。観察開始時の年齢はY1が4歳7ヶ月、Y2が3歳6ヶ月である。入園当時、彼らは日本語が全く話せなかった。調査の結果、彼らには主に（1）のような特徴が観察された。

- (1) a. 正用「に」の出現の方が正用「で」の出現よりも早かった。
- b. 「に」と「で」を脱落する誤りが観察された。
- c. 代用の誤りが観察され、特に「動作場所」において早期に「に」が過剰使用された。

このうち、(1b)の脱落に関しては、正用「に」「で」が出現する以前に、脱落のみが観察される時期があった。そして、脱落は正用の出現後も、割合は減るものの、依然として観察され続けた。このことから、久野（2003）は彼らの「に」と「で」の習得過程について、まず「に」「で」が使えない段階があり、その後徐々に「に」「で」を用いるようになっていくことや、その際、彼らが「場所表現には「に」を使用する」という学習方略を取っていた可能性があることなどを報告している。

このように、児童や幼児を対象とした研究では、習得の最初期に「に」や「で」が脱落することや、正用の出現以降も脱落が観察され続けることなどが報告されている。しかし、成人を対象とした研究では、正用の出現前に脱落のみが観察される時期があるのか、脱落はいつからいつまで観察されるのかなど、詳細に記した研究はほとんどないと思われる。そこで、本稿ではヒンディー語母語話者を対象に、成人の場合にも最初期から脱落が見られるのか詳しく調査をしたいと考える。さらに、これまでの先行研究で報告されているよ

うな、「に」あるいは「で」の過剰使用や、場所名詞に関する何らかの学習方略等が見られるのかについても、調査したい。

3. 調査

3.1 データ収集方法

被験者はヒンディー語をL1とするインド人留学生2名(S、M)である。彼らには日本語の学習経験はなく、来日後、初級クラスで日本語を勉強し始めた(週に3~4回)。彼らは大学院の授業等で特に日本語が必要なわけではなく、普段は主に英語を用いて生活していた。データ収集は、筆者が1週間に1度、被験者と45分~1時間の自由会話をし、録音したものを後に文字化した。被験者に関するデータや収集時期などは表1のとおりである。

分析対象としたデータは彼らの自発的発話であり、観察者の発話を単純に繰り返したものは対象外とした。対象とした文法項目は場所を表す「に」と「で」である。寺村(1982)、益岡・田窪(1987)を参考に、「に」は「存在場所」「到達点」などの用法(例: 駅にいる、駅には人が多い、山に登る)を含むこととし(以下「場所+に」構造と記す)、「で」は「動作場所」「状況の成立する場所」などの用法(例: 駅で会う、インドでは日本車が有名だ)を含めることとした(以下「場所+で」構造と記す)。「座る」などの動詞の場合、「に」は必ずしも必要でない(益岡・田窪1987)。しかし、本被験者達はこのような動詞の場合も「に」を用いることを明示的に学習していたため、「に」が発話されていないものは脱落の誤り(「*φ」)とみなすことにした。また、「に」と「で」を組み合わせて使える表現の場合(例: 東京で友達の家泊まった)、その正誤判断の基準は神尾(1980)や益岡・田窪(1987)などを参考にした。

発話回数の数え方について、例えば「部屋に、部屋の中にいます」のように途中で言い直した場合、「に」が2回と数えた。その他、例えば観察者の質問(例: どこでご飯を食べましたか)に対する答え(例: 食堂で)のように、動詞が省略されていても文脈から発話意図が明らかの場合も、回数に入れた。

表1 被験者に関するデータ

被験者	来日時期	①データ収集時期 ②収集時期に相当する滞在週数(月数)	
		③収集回数	④合計時間
S 30代・男性	2007年 10月	①2007年10月~2008年2月 ③12回	②3~19週目(1~5ヶ月目) ④8時間35分
M 20代・女性	2010年 4月	①2010年4月~2010年9月 ③20回	②4~23週目(1~6ヶ月目) ④20時間

3.2 ヒンディー語の場所表現

被験者のL1であるヒンディー語の場所表現について簡単に記し、日本語の表現と比較したい。ヒンディー語には場所表現「に」「で」に相当する後置詞(または格助詞)があり、その代表的なものに *men* と *par* がある²⁾。*men* は英語の *in* に相当し、「ものの内部や内面、内側、空間や時間の間、隙間など」「動作・作用の行われる場所や範囲」「所属や帰属」

などを表す。また、par は英語の on、at に相当し、「動作・作用の行われる特定された場所や位置」「動作・作用の行われる場所や位置がものの上や表面であること」などを表す (R.S.McGregor1977、田中・町田 2003、古賀・高橋 2006)。語順は日本語と同じく「名詞(斜格形) + 後置詞」となる⁽³⁾。この men と par には「に」と「で」に相当する区別がない。そのため、例えば「park (公園) + men」は「公園に」と「公園で」、「bench (ベンチ) + par」は「ベンチに」と「ベンチで」のどちらの意味としても用いられる⁽⁴⁾。(2) は park men を用いた例であり、(2a) が「公園に」、(2b) が「公園で」を表す。

- (2) a. vah park men hai.
 彼は 公園 に いる (彼は公園にいる)
- b. vah park men khel rahā hai.
 彼は 公園 で 遊んでいる (彼は公園で遊んでいる)

また、men や par のように単独で用いられる後置詞のほか、ke (「の」を表す後置詞) を伴って ke pās (～の近くに/で)、ke niche (～の下に/で)、ke bāhar (～の外に/で) のように使われる後置詞もある。(3) は ke pās を用いた例であり、(3a) が「木の近くに」、(3b) が「木の近くで」を表す。この場合も「に」と「で」に相当する区別はされない。

- (3) a. vah peṛ ke pās baithā hai.
 彼は 木 の 近くに 座っている (彼は木の近くに座っている)
- b. vah peṛ ke pās khel rahā hai.
 彼は 木 の 近くで 遊んでいる (彼は木の近くで遊んでいる)

以上の点を踏まえ、ヒンディー語母語話者が「に」「で」を習得する際の L1 転移の影響の可能性について考えたい。まず、ヒンディー語の場所表現では、ほとんどの場合、日本語と同じように後置詞が必要である⁽⁵⁾。そのため、学習者は習得の初期の段階から「に」「で」など何らかの格助詞を用いて場所を表す可能性が高いと考えられる。仮に、L1 では後置詞が必要な表現であるにもかかわらず、日本語では格助詞を脱落した場合、それが L1 転移の影響によって生じた可能性は非常に低いと思われる。

次に、ヒンディー語の men (あるいは par) には日本語の「に」と「で」に相当する区別がないため、学習者は新たに使い分けの規則を学ぶ必要が生じる。このような、L1 では1つの要素で表せるものが、L2 では2つの要素になるという対応関係を持つ文法項目は、習得が困難であると言われている。そのため、本被験者達にとっても、「に」と「で」の習得は容易でないことが予想される。また、「に」と「で」の使い分けに関して、仮にどちらか一方が過剰に使用されたり、逆に使用されなかったりする傾向が見られた場合、L1 転移の影響の可能性は低いと思われ、学習者が何らかの学習方略を取っている可能性が高いだろうと考えられる。

4. 結果と考察

4. 1 調査結果

4. 1. 1 被験者 S の結果

まず、被験者 S の結果について見ていく。「場所+で」「場所+に」の週ごとの使用状況を記したものがそれぞれ表2、表3である。表中の数字は回数、() 内の数字は割合 (%) である⁽⁶⁾。また、表2、表3をグラフ化したものがそれぞれグラフ1、グラフ2である。Sは観察期間を通じて自発的発話が少なく、単なる繰り返しが多かった。また、英語で話そうとする傾向が強かった。

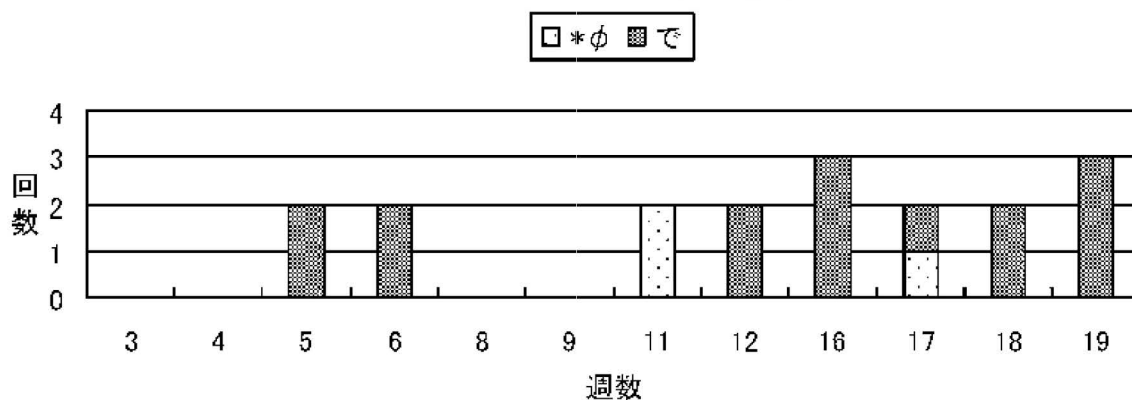
表2 Sの「場所+で」の結果

週数	正用	誤用
	で	*φ
3	—	—
4	—	—
5	2	—
6	2	—
8	—	—
9	—	—
11	—	2
12	2	—
16	3	—
17	1	1
18	2	—
19	3	—
計	15	3

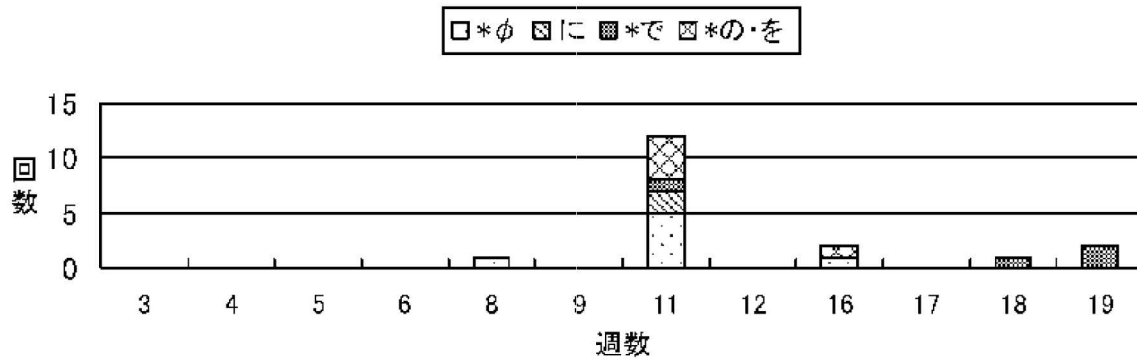
表3 Sの「場所+に」の結果

週数	正用	誤用			
	に	*φ	*を	*の	*で
3	—	—	—	—	—
4	—	—	—	—	—
5	—	—	—	—	—
6	—	—	—	—	—
8	—	1	—	—	—
9	—	—	—	—	—
11	2 (17)	5 (42)	2 (17)	2 (17)	1 (8)
12	—	—	—	—	—
16	—	1	—	1	—
17	—	—	—	—	—
18	—	—	—	—	1
19	—	—	—	—	2
計	2	7	2	3	4

グラフ1 Sの「場所+で」の結果



グラフ2 Sの「場所+に」の結果



「場所+で」の場合、5、6週目に「で」が観察された。その後、11週目に「*φ」が観察され、翌12週目以降に「で」が再び観察されるようになった。17週目には「で」と「*φ」との併用も見られた。

一方、「場所+に」の場合、8週目に「*φ」が観察され始めた。この時期は日本語クラスで同構造を学習した直後であったが、観察されたのは「に」ではなく「*φ」であった。その後、11週目に「に」が観察され、同時に「*φ」や代用「*を」「*の」「*で」も観察された。12週目以降は「に」は1度も観察されず、「*φ」や代用「*の」「*で」のみが観察されていた。

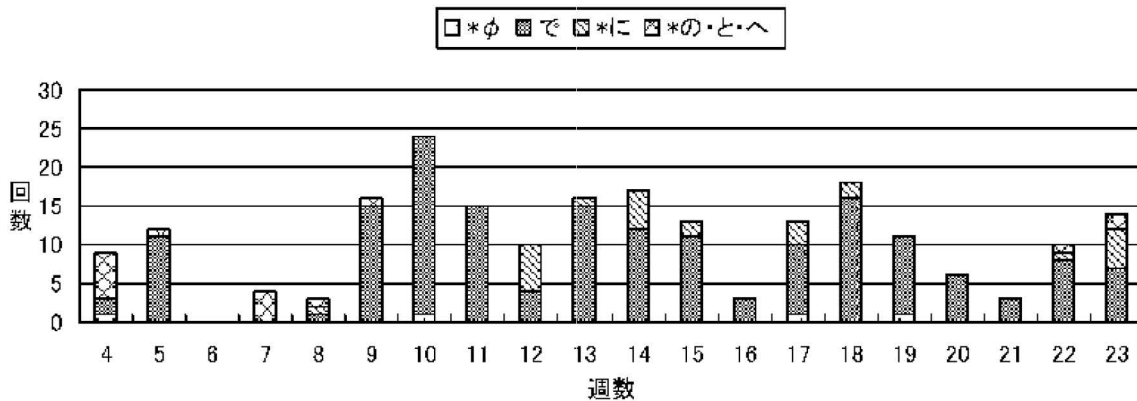
4. 1. 2 被験者 M の結果

次に M の結果について見ていく。「場所+で」の週ごとの使用状況を記したものが表4、それをグラフ化したものがグラフ3である。同構造では、観察開始直後の4週目から「で」が観察され始めた。「で」は翌5週目も観察されたが、6、7週目には1度も観察されず、その後8週目以降に再び継続的に観察されるようになった⁽⁷⁾。誤りには「*φ」や代用の助詞「*の」「*と」「*へ」「*に」があった。「*φ」が最初に観察されたのは4週目であり、その後10～19週目にも計3回観察された。また、代用の助詞は計43回あったが、そのうち「*の」「*と」は比較的早期に観察され（の：4、5週目、と：5、8週目）、発話回数も比較的少なかったのに対し（の：2回、と：5回）、「*に」は8週目から23週目まで断続的ではあるが観察され、回数も多かった（26回）。

表4 Mの「場所+で」の結果

週数	正用		誤用			
	で	*φ	*の	*と	*へ	*に
4	2	1	1	—	—	—
5	11 (65)	—	1 (6)	1 (6)	4 (23)	—
6	—	—	—	—	1	—
7	—	—	—	—	—	—
8	1 (17)	—	—	4 (67)	—	1 (17)
9	15 (94)	—	—	—	1 (6)	—
10	23 (92)	1 (4)	—	—	1 (4)	—
11	15 (100)	—	—	—	—	—
12	4 (40)	—	—	—	—	6 (60)
13	15 (94)	—	—	—	—	1 (6)
14	12 (71)	—	—	—	—	5 (29)
15	11 (85)	—	—	—	—	2 (15)
16	3	—	—	—	—	—
17	9 (69)	1 (8)	—	—	—	3 (23)
18	16 (88)	—	—	—	—	2 (12)
19	10 (91)	1 (9)	—	—	—	—
20	6 (100)	—	—	—	—	—
21	3	—	—	—	—	—
22	8 (80)	—	—	—	1 (10)	1 (10)
23	7 (50)	—	—	—	2 (14)	5 (36)
計	171	4	2	5	10	26

グラフ3 Mの「場所+で」の結果

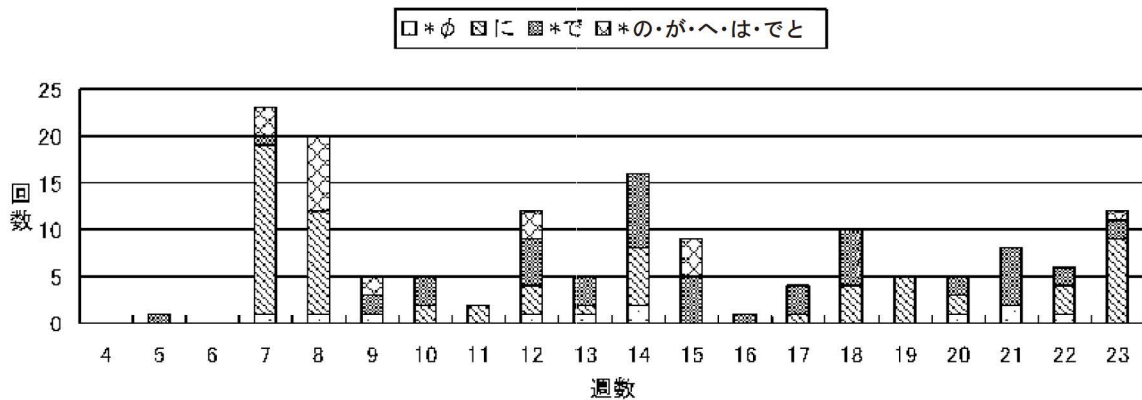


一方、Mの「場所+に」における使用状況を記したものが表5、それをグラフ化したものがグラフ4である。同構造が初めて観察されたのは5週目であるが、その時用いられたのは「*で」であった。この時期、Mはまだ「に」を学習していなかった。その後、7週目に「に」が初めて観察され、その後も断続的ではあるが観察され続けた。7週目には「*φ」も観察され、翌8週目以降も消えることはなかった。また、代用の誤りでは、5週目に観察され始めた「*で」に加え、7週目以降には「*の」「*が」「*へ」「*は」「*でと」も観察されるようになった。これらの代用の助詞のうち、最も多く用いられたのは「*で」であり、71回中50回を占めていた。

表5 Mの「場所+に」の結果

項目 週数	正用	誤用						
	に	*φ	*で	*の	*が	*へ	*は	*でと
4	—	—	—	—	—	—	—	—
5	—	—	1	—	—	—	—	—
6	—	—	—	—	—	—	—	—
7	18 (78)	1 (4)	1 (4)	2 (9)	1 (4)	—	—	—
8	11 (55)	1 (5)	—	1 (5)	—	6 (30)	1 (5)	—
9	—	1 (20)	2 (40)	2 (40)	—	—	—	—
10	2 (40)	—	3 (60)	—	—	—	—	—
11	2	—	—	—	—	—	—	—
12	3 (25)	1 (8)	5 (42)	1 (8)	—	—	—	2 (17)
13	1 (20)	1 (20)	3 (60)	—	—	—	—	—
14	6 (37)	2 (12)	8 (50)	—	—	—	—	—
15	—	—	5 (56)	—	—	4 (44)	—	—
16	—	—	1	—	—	—	—	—
17	1	—	3	—	—	—	—	—
18	4 (40)	—	6 (60)	—	—	—	—	—
19	5 (100)	—	—	—	—	—	—	—
20	2 (40)	1 (20)	2 (40)	—	—	—	—	—
21	—	2 (25)	6 (75)	—	—	—	—	—
22	3 (50)	1 (17)	2 (33)	—	—	—	—	—
23	9 (75)	—	2 (17)	—	—	1 (8)	—	—
計	67	11	50	6	1	11	1	2

グラフ4 Mの「場所+に」の結果



4. 1. 3 被験者2名の結果の特徴

4. 1. 3. 1 「*φ」について

以上の結果を基に、「*φ」、代用の誤り、場所を示す名詞句（以下「場所名詞句」）の3つの観点から、彼らの「場所+で」「場所+に」の習得の特徴をまとめたい。また、発話例もいくつか記していく。

初めに「*φ」について見ていく。彼らには「場所+で」「場所+に」の両構造において「*φ」が観察された。Mの場合、「場所+で」においては4週目に、「場所+に」において

は7週目に、それぞれ「*φ」と正用とが同時に観察され始めた。(4)は「*φ」が観察され始めた時期の発話例である。(4a)(4b)は「*φ」と「で」が観察され始めた4週目の発話例、(4c)(4d)は「*φ」と「に」が観察され始めた7週目の発話例である。本稿で分析対象とした表現には網掛けをした。Rは観察者を示す。〈〉は発話時の状況である。発話例中の()内には発話されていない語彙を、(→)には本来使用すべき語彙を筆者が補った。また、発話例最後の()内の数字は観察された時期(週数)である。

(4) Mの「*φ」が観察され始めた頃の発話例

a. R: この鞆をどこで買いましたか。

M: わたしかばんの インド インドです。*インド(で) かいます かいました。(4)

b. R: 〈絵本を見ながら〉(シンデレラは) どこで泣きますか。

M: うち うちで なきます た。(4)

c. *わたしは ニューデリー(に) あります した(→いました)。(7)

d. ハワーメヘルは ジャイプールに あります。(7)

一方、Sの場合、「場所+で」においては「で」が5、6週目に観察されていた(例: うちで かいかんで、6週目)。しかし、この時期は日本語クラスで「場所+で」を学習した直後であることや、その後数週間、同構造の場所表現が全く観察されなかったことなどから、この時期に観察された「で」は一時的なものであった可能性もあると考えられる。11週目になると「*φ」が初めて観察され、翌12週目以降、再び「で」が観察されるようになった。(5a)は11週目の「*φ」の発話例、(5b)は翌12週目の「で」の発話例である。

また、Sの「場所+に」においては、まず「*φ」が8週目に観察され、その後11週目に「に」が観察された。(5c)は8週目の「*φ」の発話例、(5d)は11週目の「に」の発話例である。

(5) Sの「*φ」が観察され始めた頃の発話例

a. 〈絵の人物の説明〉*ぎん ぎんこう(で) はた(らきます) something。(11)

b. インドで he is coming to my うち。(12)

c. R: 鞆の中に何がありますか。

S: *かばんの(中に) ラップトップ にほんご books。(8)

d. タバコに どこに ありますか。(11)

以上のように、彼らの初期の発話状況から、「場所+で」「場所+に」の両構造において、「*φ」は正用の出現とほぼ同時期、あるいはそれ以前から観察され始めていたと考えられる。「*φ」が観察された「*インド(で)」「*銀行(で)」などの場所表現は、ヒンディー語ではいずれも後置詞が必要である。そのため、彼らに見られた「*φ」がL1転移の影響によって生じた可能性は低いだろうと思われる。

さらに、「*φ」は両構造において、正用の出現後も消失することはなかった。(6)(7)はそれぞれMとSの正用出現後に観察された「*φ」の発話例である。Mの場合、「で」の脱落は(6a)「*other state(で)勉強します」や(6b)「*very near 近い(→近くで)見ました」のように、場所名詞句の日本語表現が分からない時に多く見られ、「に」の脱落は(6c)「*山(に)登る」や(6d)「*手(に)結ぶ」のように、「ある」「いる」以外の動詞を用いた時に多く見られた。一方、Sの(7a)の例では「*φ」と「で」とが同時に観察されており、「で」の定着が不安定である様子がうかがえる。

(6) Mの正用出現後の「*φ」の発話例

- a. 〈友達について〉*いまは other state(で) べんきょうします。(17)
- b. 〈花火について〉*わたしは very near ちかい(→近くで) みました。(19)
- c. 〈小さい山に登り寺へ行った話〉*おてらは ちいさいゆみ ゆみ(に)のりました。(14)
- d. 〈兄弟が姉妹の手に糸を結ぶ祭りの説明〉*て(に)いとを むすび むすび(ます)。(21)

(7) Sの正用出現後の「*φ」の発話例

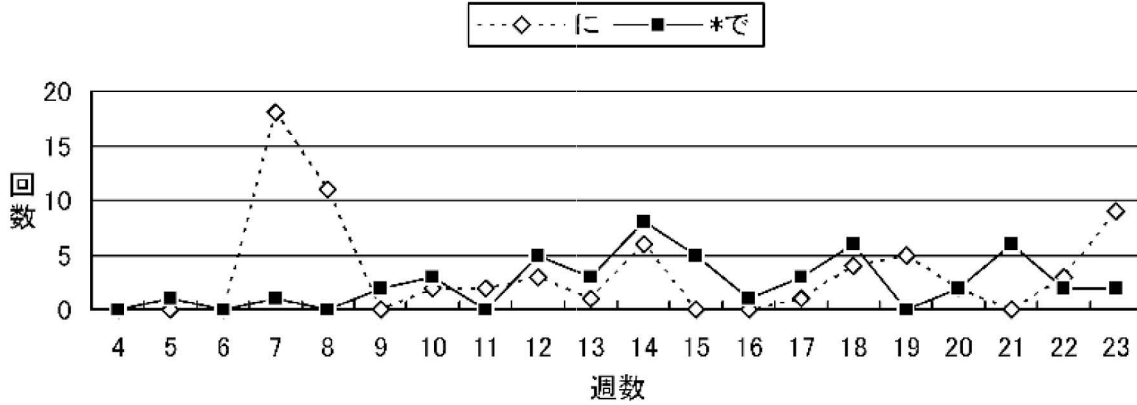
- a. *デパートを いきたり north せいきょう(で) コーヒーをたべたり うちで ランチ ひるごはん たべたり came back だいがくの いきたり。(17)
- b. *わたしともだち who is いる とうきょう(に) went to some other places。(16)

4. 1. 3. 2 代用の誤りについて

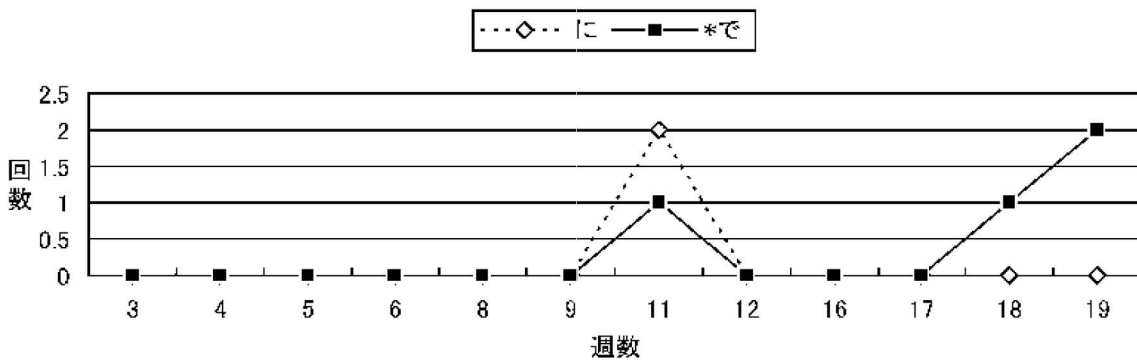
代用の誤りには主に2つの特徴が見られた。1つ目の特徴は「場所+に」において「*で」が多く用いられた点である。代用の助詞のうち「*で」が占める割合は、Mの場合、70%(71回中50回)、Sの場合、44%(9回中4回)であった。さらに「*で」は断続的ではあるが観察期間を通じて見られ、週によっては正用「に」よりも多く用いられた。そこで、彼らの「場所+に」における「に」と「*で」の発話回数を週ごとに示してみた。グラフ5はMの、グラフ6はSの結果である。これらのグラフからは、「場所+に」が日本語クラスで導入された直後(導入時期はMが6~7週目、Sが7~8週目)には「に」の使用が一旦増

えるものの、その後は減少し、「に」の代わりに「*で」が使用される傾向があることがうかがえる。

グラフ5 Mの「場所+に」における「に」と「*で」の回数

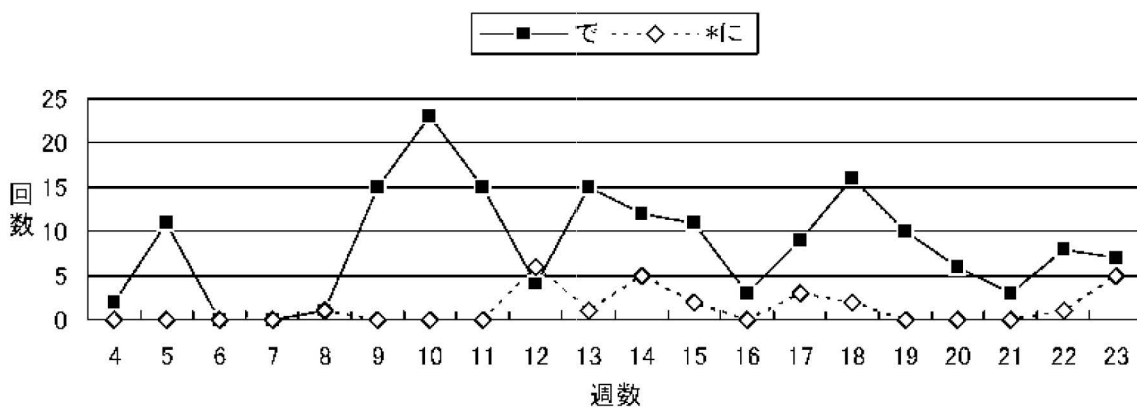


グラフ6 Sの「場所+に」における「に」と「*で」の回数

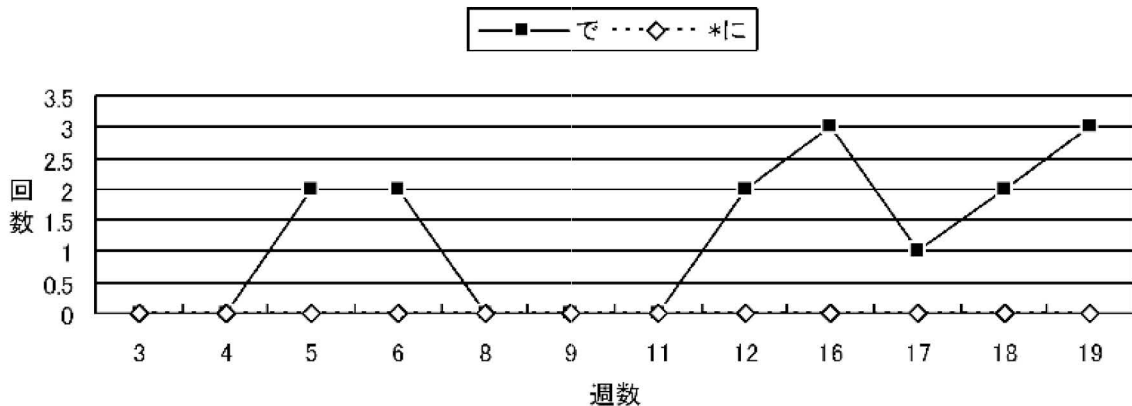


一方、彼らの「場所+で」における代用「*に」の発話回数はそれほど多くなかった。グラフ7、グラフ8は、それぞれMとSの「場所+で」における「で」と「*に」の発話回数を示したものである。両者共に「場所+で」を学習して以降（導入時期はMが4週目、Sが5週目）、「で」は比較的多く観察されていた。これに対し「*に」は少なく、特にSについては全く観察されなかった。このことから、彼らには場所を示す表現として「で」を多

グラフ7 Mの「場所+で」における「で」と「*に」の回数



グラフ8 Sの「場所+で」における「で」と「*に」の回数



く使用する傾向があったと言える。

2つ目の特徴は、「場所+に」「場所+で」の両構造で代用として用いられた助詞 (M: の、は、へ、が、と、に、S: の、で、を) は全て、本来の正しい用法としても用いられていたという点である。さらに、これらの助詞の初出時期を見てみると、まず正用として用いられ、その後、代用としても用いられていた。これらの助詞が正用あるいは代用として初めて観察された時期を記したものが、表6 (Mの場合) と表7 (Sの場合) である。

表6 Mの助詞の初出時期

	「場所+に」					「場所+で」			
	で	の	は	へ	が	の	と	へ	に
正用	4	4	4	5	7	4	4	5	7
代用	5	7	8	8	7	4	5	5	8

表7 Sの助詞の初出時期

	「場所+に」		
	の	で	を
正用	4	5	8
代用	11	11	11

Mの場合、「で」「の」「は」「と」が4週目に (例: 大学の研究生です)、「へ」が5週目に (例: 神戸へ行きました)、「が」「に」が7週目に (例: 部屋に猫がいます)、本来の正しい用法として初めて観察された。そして、これらの助詞は同時期あるいは1~4週間経ってから、「場所+に」あるいは「場所+で」において代用として用いられていた。一方、Sの場合、正用として「の」が4週目 (例: ヒストリーの本ですね)、「で」が5週目 (例: インドで I studied counting)、「を」が8週目に (例: たばこを吸います) 観察され、これらはいずれも11週目に「場所+に」において代用として用いられた。以上のことから、ある助詞を正用として用いることが出来るようになると、その助詞を何らかの理由で代用としても用いるようになるのだろうと予想される。Sには「場所+で」において「*に」などの代用が観察されなかったが、その理由の1つには、助詞を代用として用いる以前に、本来の用法としてさえ使うことができていなかったことが考えられる。

代用の助詞を用いた彼らの発話例をいくつか記す。(8)はMの発話例である。(8a)はまだ「場所+に」を学習していない5週目に「*で」を用いて同構造を表現した例である。

(8b)は「場所+に」を学習した直後の7週目に「に」「*で」の両方を用いている例であり、混乱している様子がうかがえる。(8c)~(8f)はそれぞれ「*が」「*と」「*へ」「*の」の例である。

(8) M の代用の発話例

- a. R : (遊園地は) どこにありますか。ニューデリーにありますか。
M : *ニューデリーで (→に) あります。(5)
- b. R : M さんの友達はどこにいますか。
M : どこに? *あ、オフィス オフィスで (→に) います。オフィスに います。(7)
- c. *(車は) にわ にわが (→に) あります。(7)
- d. *かいかんのキッチンと (→で) はなしました。(8)
- e. *じてんしゃは どこへ (→に) ありますか。(8)
- f. *これバザールは ニューデリーの (→に) あります。(8)

(9) は S の代用の発話例である。(9a) (9d) は「*で」、(9b) は「*を」、(9c) は「*の」を用いた例である。S の場合、助詞の誤りだけでなく、(9b) 「*住んで (います)」のように動詞が不完全なものや、(9d) のように英語を用いた表現が多く見られた。

(9) S の代用の発話例

- a. R : ケーキ (売り場) はどこにありますか。
S : *エレベーターのとなりで (→に)。(11)
- b. *ムンバイを (→に) すんで (います)。(11)
- c. R : どこに住んでいますか。
S : *かいかんの (→に) いますか。(11)
- d. *やまで (→に) many hot springs。(18)

4. 1. 3. 3 場所名詞句について

場所表現で用いられた場所名詞句について見てみると、M には主に2つの特徴がうかがえた⁸⁾。1つ目は、「(木の) 上」のように位置を示す名詞句 (以下「位置」) が「に」と共に用いられていたという点である。「場所+に」においては「位置」を含む場所表現が29回あり、「*φ」が3回観察されたものの、他は全て「に」を伴っていた。さらに「場所+で」においても「位置」を含む表現は「*に」を伴って用いられていた (例: *水の中に子供のボールをします、12週目)。表8は「位置」を含む場所表現の全発話例である。複数回観察

されたものは（ ）に回数を記した。これらが観察された時期は7～20週目であった。

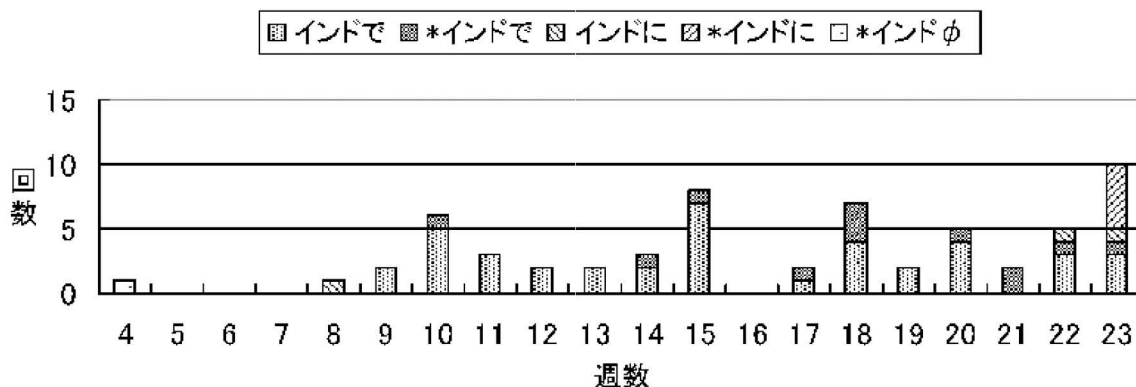
表8 Mの「位置」を含む場所表現の発話例

「場所+に」		「場所+で」	
*周りφ	テーブルの上に	中に (4回)	*水の中に
*家の外φ	公園に木の上に	キャッスルの中に	*水の中に (2回)
*うみ上φ	公園にベンチの上に	箱の中に	*木の下に (2回)
木上に	湖の近くに	ドアの後ろに	(計5回)
木は上に	コンノートプレースの近くに	ジャスコの後ろに	
机の上に	ニューデリーの外に	銀行の隣に	
車の上に	ゴールデンシャワー下に	大学の前に	
屋根の上に	本の下に	湖の周りに	
自転車の上に	デリーの下に	(計29回)	

これらの表現はヒンディー語では *men* (～に/で)、*par* (～に/で)、*ke niche* (～の下に/で)、*ke pās* (～の近くに/で) など様々な後置詞によって表される。それにも関わらず、Mは常に「に」を用いていたことになる。このことから、Mは「位置」を「に」選択の際の1つの手がかりとして捉え、「位置+に」という固まり表現として使用していた可能性があると考えられる。

2つ目の特徴は、「場所+に」「場所+で」の両構造において「インド」「家」「大学」などの場所名詞句が比較的多く観察された点である。特に「インド」(61回)は「大学」(23回)や「家」(26回)などより多く観察された。さらに、これらの場所名詞句は「で」あるいは「*で」を伴って用いられることが多く、例えば「インド」の場合、61回のうち「で」が40回、「*で」が12回であった。同様の傾向は「家」(26回中「で」15回、「*で」3回)や「大学」(23回中「で」11回、「*で」7回)の場合も見られた。グラフ9は「インド」を用いた場所表現(インドで、*インドで、インドに、*インドに、*インドφ)の週ごとの使用状況を記したものである。

グラフ9 Mの「インド」を用いた場所表現の使用状況



このグラフからは、正用「インドに」が8週目に一旦観察されたものの、その後9～21週目には「インドで」「*インドで」のみが観察されている様子が分かる。そして、22週目

になると再び「インドに」が観察され、翌23週目には「インドに」だけでなく「*インドに」も観察されるようになった。これらの発話例は(10)のとおりである。(10a)は8週目の「インドに」の例、(10b)～(10f)は9週目以降の「インドで」「*インドで」の例である。(10g)は22週目の例であるが、一旦「*インドで」と言った直後に「インドに」と言い直しており、試行錯誤しながら発話している様子や、存在場所には「に」を使うということを認識し始めている様子などがうかがえる。(10h)は23週目の「*インドに」の例である。

(10) Mの「インド」を用いた発話例

- a. 〈インドにある日本人学校の話〉がっこう **インドに** あ、いました。(8)
- b. わたしたち **インドで** フェスティバルを 行きました。(9)
- c. **インドで** クルター たかいじゃないです。(10)
- d. ***インドで (→に)** ソイビーンズのナゲッツ だいでナゲッツ あります。(14)
- e. **インドで** スズキのバイクはとてもゆうめいです。(15)
- f. ***インドで (→に)** ちいさい やま ありません。(18)
- g. ***インドも インドで (→に) インドに** たくさんビューティーパーラーあります。(22)
- h. ***インドに (→で)** たくさん たくさん おんなのひと ココナッツオイルを つ(か)い、つ(か)ってます。(23)

このように、Mは何らかの理由で比較的早期の段階から「インド」と「で」とを強く結び付け、1つの固まり表現のように用いていたことがうかがえる。そして「場所+で」の表現として使うようになった「インドで」などを「場所+に」にもそのまま適用していたのではないかと考えられる。このような固まり表現の誤った適用が「*で」の過剰使用の一因となっている可能性があると思われる。

5. おわりに

本稿では、ヒンディー語をL1とするインド人留学生2名の発話データを基に、「場所+に」と「場所+で」の習得過程について調査した。その結果、主に次のような特徴が明らかとなった。

- (11) a. 「場所+で」「場所+に」の両構造で「*φ」が観察された。「*φ」は正用とほぼ同時期かそれ以前に観察され始め、正用の出現後も消えなかった。
- b. 「場所+で」「場所+に」の両構造で代用の誤りが観察された。特に「場所+に」における「*で」の過剰使用が顕著であった。
- c. 場所名詞句のうち、「位置」を「に」と結びつける傾向や、「インド」を「で」と結びつける傾向が見られた。

これらの特徴のうち、(11a)の「*φ」が観察された点については、久野(2003)の幼児や白畑・久野(2008)の児童でも同様の結果が報告されている。本被験者達は明示的に日本語の文法を学習しており、さらに、彼らのL1でも場所を表す後置詞が必要である。それにも関わらず、習得の最初期に「*φ」が観察されたことになる。このことから、学習者の年齢に関わらず、「場所+で」「場所+に」の習得過程の最初期には「に」「で」を脱落するという類似した特徴があることが予想される。また(11c)の「位置」と「に」を結びつけるという傾向は、成人学習者を対象とした迫田(2001)や若生(2012)などでも報告されており、L1の違いに関わらず、学習者が同様の学習方略を用いている可能性があると考えられる。

一方、(11b)の「*で」の過剰使用については、松田・斎藤(1992)の韓国人学習者に同様の結果が見られるものの、あまり多くの事例は報告されていない。「に」と「で」の用法の違いに関しては、「で」の方がより広い空間を表し、様々な動詞と共に使うことが出来ると言われている(神尾1980、寺村1982、益岡・田窪1987)。また、神尾(1980)は、「に」は述語句と直接結びついた位置の指定を行い、「で」は文全体と結びついて述語句の表す動作、出来事、事態などの生ずる背景となる場所を指定するとも述べている。本被験者達の場合、場所表現としてまず学習したのは「で」であった。さらに、初級レベルの文法項目のうち、特に初期においては「で」を用いる表現が多い。そのため、おそらく本被験者達は「に」と「で」を使い分ける際の学習方略として、限られた動詞としか使えない「に」ではなく、様々な動詞と共に使える「で」を場所表現として用いていた可能性もあるのではないかと思われる⁽⁹⁾。

これまで、ヒンディー語をL1とする被験者の縦断的調査はほとんど行われていない。そのため、本調査で得られた結果は、今後のL2学習者の助詞の習得過程を解明する上で、何らかの示唆を与えるものと思われる。本稿では、Sは来日後19週目、Mは来日後23週目までのデータを基に調査をしたが、今後、それ以降のデータも用いてさらに調査を進めたいと考える。また、本調査で見られた「*で」の過剰使用が他のヒンディー語母語話者にも見られる傾向なのか、なぜ「*で」を過剰使用するのかなど、今後、より詳しい調査をしていく必要があると思われる。

注

- (1) 文法的に不適格な表現には「*」を記した。
- (2) 表記に関して、ヒンディー語の文字はデーヴァナーガリー文字であるが、本稿ではHardev(1984)を参考にローマ字で記した。

- (3) 名詞は後置詞と共に用いられる場合、斜格形という語形になる。例えばkamrā (部屋) という名詞は kamre という斜格形に変化し、kamre men (部屋に/で) となる。
- (4) 例えば「公園でベンチに(座る)」を表す場合、par と men の両方を用いて park men bench par と表すことが出来る。また、par と men のいずれを使うかで意味が限定される場合もあり、例えば「家、家屋、家庭」等を表す ghar の場合、ghar men は「家の中に、建物の内部に」、ghar par は「在宅で」となる(田中・町田 2003)。
- (5) 場所表現にはyahā (ここに/で)、kahā (どこに/で) などの表現もある。これらの語彙の品詞は副詞あるいは代名詞であり、後置詞を伴う場合と伴わない場合のいずれの表現もできるようである(例: yahā ここに/で、yahā par ここに/で)。
- (6) 割合(%)は、各週の発話回数の合計が5回以上の場合にのみ記した。Mの結果の表についても同様である。
- (7) 6、7週目に「場所+で」の発話回数が少なかった要因として、日本語クラスで勉強した形容詞表現や存在場所表現などを主に用いて会話を行ったことが考えられる。
- (8) Mには「どこへ」を固まり表現として用いている様子もうかがえた。例えば8週目には「*スーパーはどこへありますか」のような例が「場所+に」構造で5回観察され、8～20週目には「*ふねはどこへですか」(分析対象外)のような例も数回観察されていた。
- (9) Mの場合、ヒンディー語のbhārat men (インドに/で)を「bhārat men =インドで」と解釈していた可能性もあるかもしれない。また、岩崎(2001)は「特定の場所=に」「一般的な場所=で」と捉える学習者もいたと報告していることから、本被験者達が「特定された場所や位置」等を表す par を「に」、「動作・作用の行われる場所や範囲」等を表す men を「で」と捉えていた可能性もないとは言えない。しかし、これらの可能性の議論については今後の調査課題としたい。

参考文献

- 福間康子(1996)「作文からみた初級学習者の格助詞「に」の誤用」『九州大学留学生センター紀要』第8号、九州大学留学生センター、61-74
- Hardev Bahri (1984) *Learners'Hindi-English Dictionary*. Kashmir Gate, Dehli: Ravindra Printing Press.
- 蓮池いずみ(2004)「場所を示す格助詞「に」の過剰使用に関する一考察—中級レベルの中国語母語話者の助詞選択ストラテジー分析—」『日本語教育』112号、日本語教育学会、52-61
- 久野美津子(2003)「ブラジル人幼児の場所表現「に」と「で」の習得過程」『日本語教育』117号、日本語教育学会、83-92
- 岩崎典子(2001)「英語母語話者は「で」と「に」をどのように捉えているのか～インタビュー調査から見えてきたこと～」『2001年度日本語教育学会春季大会予稿集』日本語教育学会、61-66
- 神尾昭雄(1980)「「に」と「で」—日本語における空間的位置の表現」『言語』Vol.9、No.9、大修館書店、55-63

- 古賀勝郎・高橋明 (2006) 『ヒンディー語＝日本語辞典』大修館書店
- 久保田美子 (1994) 「第2言語としての日本語の縦断的習得研究—格助詞「を」「に」「で」「へ」の習得過程について—」『日本語教育』82号、日本語教育学会、72-85
- 増田恭子 (2001) 「第二言語としての日本語学習者の場所格に関するストラテジーの使用の変化」『2001年度日本語教育学会春季大会予稿集』日本語教育学会、55-60
- 益岡隆志・田窪行則 (1987) 『日本語文法セルフマスターシリーズ3格助詞』くろしお出版
- 松田由美子・斎藤俊一 (1992) 「第2言語としての日本語学習に関する縦断的事例研究」『世界の日本語教育』2、国際交流基金日本語センター、129-156
- R. S. McGregor (1977) *Outline of Hindi Grammar with Exercises*. Oxford University Press.
- 迫田久美子 (2001) 「学習者の誤用を生み出す言語処理のストラテジー (1) —場所を表す「に」と「で」の場合—」『広島大学日本語教育研究』第11号、広島大学、17-22
- 白畑知彦・久野美津子 (2008) 「中国人児童による日本語格助詞の発達過程の記述—来日後4ヶ月間の記録—」『静岡大学教育学部研究報告 (人文・社会科学篇)』第58号、静岡大学、143-158
- 田中敏雄・町田和彦 (2003) 『CD エクスプレスヒンディー語』白水社
- 寺村秀夫 (1982) 『日本語のシンタクスと意味 I』くろしお出版
- 若生正和 (2012) 「韓国人日本語学習者による場所の格助詞「に」と「で」の選択に関する研究」『大阪教育大学紀要第I部門』第60巻、第2号、大阪教育大学、91-99

The Case Study of Acquiring Japanese Locative Case Markers *ni* and *de* by Hindi Speakers

HISANO, Mitsuko

The purpose of this paper is to investigate the process through which two adult Hindi speaking Japanese language learners acquire the locative case markers *ni* and *de*. Samples of spontaneous Japanese speech were collected longitudinally.

The results show as follows: (a) Omitting *ni* or *de* was observed. The first appearance of omitting was earlier than that of correct case markers, or the period of omitting and producing case markers was at almost the same time. Omitting these case markers did not disappear even after the learners began to produce *ni* or *de* correctly. (b) The learners sometimes substituted other case markers in place of *ni* or *de*, and in particular, they overused *de* in place of *ni*. (c) As for the place noun phrases which were used with locative case markers, the learners had the tendencies to connect the nouns denoting position with *ni*, and also to connect *Indo* ('India') with *de*.

The features of omitting *ni* or *de* from the very early stage referring in (a) are similar to those of some precedent research based on data from L2 children. On the other hand, the tendencies to overuse *de* and the tendencies to connect the nouns denoting position with *ni* have been reported in some research based on data from L2 adult learners. Judging from these results, there seems to be basically similar features in the acquiring process for L2 learners even when their ages or their first languages are different.